

## 第1部

### 被災地の女子中学生が作成した紙芝居～実演と活動報告～

#### 紙芝居を作成した石巻市立門脇中学校の皆さんほか



阿部 菜波 (あべ ななみ)  
亀山 矩佳 (かめやま のりか)  
加賀 智美 (かが さとみ)  
木村 杏奈 (きむら あんな)  
菊地 珠生 (きくち たまき)  
菊地 絢女 (きくち あやめ)  
近藤 沙也果 (こんどう さやか)  
阿部 瑞生 (あべ みずき)  
菊地 未准 (きくち みのり)  
淀川 雅陽 (よどかわ みやび)  
近藤 優 (こんどう ゆう)

以上、紙芝居発表順 (左奥より)



#### 紙芝居師

金谷 邦彦 (かなや くにひこ)

池袋舞台芸術学院卒業後、劇団員を経て、文京区の学校職員に。約21年間勤めた後、2009年(平成21)年から紙芝居師になり、都内の商店街などで公演活動を行う。

東日本大震災では、単独、被災地に飛び込み、紙芝居を公演して回った。「子どもたちに近づきたい」と小学校勤務を辞めてから始めた紙芝居が、被災地の子どもたちの心を開く。中学生が紙芝居を作り、小学生が津波を怪獣に擬した絵で思いのたけを表した。画用紙で、カードで、子どもたちは支援に感謝し、10年後、復興した街を見に来てください、と伝える。

1984年 文京区学校職員 (～2006年)

2009年 紙芝居師

## 第2部 シンポジウム「震災と人権～一人一人の心の復興を目指して～」



コーディネーター

田中 正人（たなか まさと）

財団法人人権教育啓発推進センター理事  
元読売新聞東京本社編集局次長

---

1968年 読売新聞社入社

東京本社編集局社会部記者、解説部記者、編集局次長など歴任  
法政大学非常勤講師（人権教育）、社団法人日本ユネスコ協会  
連盟評議員

2001年 読売新聞社退職

2001年 国民生活センター理事

2006年 財団法人人権教育啓発推進センター理事

2007年 独立行政法人国民生活センター参与

### 【主な著書】

『路地裏の人権』明石書店

『識字』（共著）明石書店

『わたしと人権』（共著）ぎょうせい ほか



パネリスト

**阿部 憲子(あべ のりこ)**

南三陸ホテル観洋 女将

---

1983 年 東洋大学短期大学ホテル観光学科卒業

株式会社阿部長商店ホテル観洋入社

1988 年 女将就任

**◆地震・津波直後の対応**

- ・地上階が5階のホテルは1、2階が津波の被害を受け、ライフラインも寸断しました。  
ホテルのお客様と駆け込んできた地元住民、約350人を守らなければ、と決意しました。
- ・“籠城”を覚悟し、食材の量を確認し、350人1週間分の献立を調理担当に指示しました。  
スタッフはおにぎり1個を2人で分け合った時もあります。

**◆被災者が頑張らないと、5年後・10年後、町のあり様が違ってしまう**

- ・やむを得ず町を出て行く住民が増えました。少しでも留まってほしい思いで、ホテルを二次避難の場所へと水が無い状況であったが、名乗りを上げました。
- ・600人の方々に4か月間、国の援助も受け、食事と部屋を提供しました。
- ・住民の受け入れに際し、将来へ向け、街づくりを担ってもらう学生や地域振興に欠かせない商店、工場などの経営者を中心にホテルに来ていただきました。
- ・若い人の流出防止になればと、若いスタッフで日帰りの“食事処”を4月中旬に立ち上げるなど若者が働く姿を見てもらう工夫もしました。

**◆災害時、柔軟に機動的に動ける民間企業の役目と役割**

- ・十人十色ならぬ“一人十色”の時代で、様々なニーズに毎日接している柔軟な考えが震災時の混乱がある中には役に立ちました。
- ・バラバラになった地域コミュニティの絆が少しでも強まれば、と多種多様なイベントを開催し、住民に来ていただきました。
- ・ボランティア団体の協力により“寺子屋”を開き、子どもの教育をサポートしました。
- ・民間で出来る役割もある反面、一度でも食中毒を出したら営業停止。水の止まっていた間、途切れない緊張感と集中力が必要になりました。
- ・一人の力では復旧・復興を遂げることは不可能だが、一人ひとりがやらなくては、ふるさととは守れない。

**◆大自然と向き合う**

- ・大自然の猛威に破壊されたが、南三陸は海なくしては語れません。災害が起こった時はどう向き合っていくか、常に考えていかなければならないと思います。
- ・そのためにも、今回の体験を語り継いでいくことが残された私達の出来ること。日本中から一人でも多くの方々に細く長く現地へお越しいただきたいです。



## パネリスト

### 黒田 裕子(くろだ ゆうこ)

NPO法人阪神高齢者・障害者支援ネットワーク  
理事長

---

昭和49年4月～昭和59年3月	兵庫医科大学附属病院 看護部 勤務
昭和53年4月～昭和59年3月	西宮医師会准看護学校非常勤講師
昭和56年4月～昭和59年3月	尼崎医療センター附属看護専門学校非常勤講師
昭和59年3月	宝塚市立病院設立準備のため兵庫医科大学附属病院を退職
昭和59年4月～平成5年6月	宝塚市立病院看護部に勤務(副総看護師長)
平成5年7月～平成7年7月	宝塚市老人保健施設設立準備室 事業主幹
平成7年～平成23年3月	大阪コミュニティーワーカー非常勤講師(ターミナル)
平成9年4月～13年10月	三重県立看護大学講師(ターミナル) (ホスピタル実習) (ふれあい看護実習Ⅰ) (ふれあい看護実習Ⅱ) (看護総合実習) (卒業研究)
平成9年4月～平成11年3月	神戸山手女子短期大学(ボランティア概論)
平成11年～平成21年3月閉校	兵庫医科大学附属看護専門学校非常勤講師 (災害看護) (在宅看護論の中でのターミナル)
平成13年～平成20年	花園大学非常勤講師(マネジメント論)
平成13・14年	関西学院大学 特別講義(社会学の中での在宅)
平成15年～平成22年3月	神戸総合医療専門学校非常勤講師(在宅看護)
平成16年～	播磨看護専門学校非常勤講師(在宅看護)
平成16年4月～	神戸市看護大学非常勤講師/日本赤十字看護大学特別講師
平成18年7月～	神戸女子大学非常勤講師(キャリア教育)
平成20年4月～	西神看護専門学校非常勤講師/関西看護医療大学特別講師
平成21年4月～	愛知医科大学・同大学院非常勤講師
	京都橘大学特別講師(ターミナル)/兵庫県立舞子高校特別非常勤講師
平成22年4月～	和歌山県なぎ看護専門学校非常勤講師 ハートランドしぎさん看護専門学校非常勤講師 倉敷中央看護専門学校非常勤講師/福井大学非常勤講師

#### 【主な著書】

- 『ナースコールの向こう側』(単著) サンルート・看護研修センター
- 『人間が生きる条件』(共著) 岩波書店
- 『阪神・淡路震災下の看護婦たち』医学書院
- 『ケアマネジメント入門ーこれからの介護福祉士のために』(共著) 中央法規
- 『病院防災の指針』(共著) 日総研出版
- 『一般病院・病棟における緩和ケア・癒しの看護』(共著) 日総研出版
- 『固定チームナーシングの導入と実際』(単著) サンルート・看護研修センター
- 『社会福祉調査論』(共著) 中央法規
- 『災害看護ー人間の生命と生活を守る』(共著) 株式会社メディカ出版
- 『ボランティアが社会を変える』(共著) 関西看護出版社
- 『救急看護』9 プレホスピタルケア・災害看護(共著) 中山書店
- 『看護師さん聴いて・・・』(単著) 関西看護出版社
- 『災害時のヘルスプロモーション』(共著) 荘道社
- 『災害看護』(共著) 南山堂
- 『災害と共に生きる文化と教育』(共著) 昭和堂
- 『災害看護への取り組み』CD 監修 ビデオパック・ニッポン
- 『災害看護演習』(共著) 南山堂
- 『災害時のヘルスマネジメントー減災に向けた施設内教育研修・訓練プログラム』(共著) 荘道社
- 『災害福祉とは何か』(共著) ミネルヴァ書房 他 専門雑誌に多数 ほか



黒田 裕子

NPO 法人阪神高齢者・障害者支援ネットワーク理事長

## くらしをサポートする災害支援——今、被災者をどう支えるか——

阪神・淡路大震災の被災者である私も、今回の東日本大震災の災害規模の大きさは想像を絶するものでした。今回の地震災害の大きな特徴は以下4点にあります。①巨大規模（マグニチュード9.0、阪神・淡路大震災の1,450倍）、②石油の供給減による物流の途絶のため支援困難な期間が長く続き、関連死もこれまでとはかなり違っていた、③広範囲かつ甚大な津波被害は直接死の方々の確定がまだまだ困難な状況、④原発被害、です。

自然災害に加えて原発事故はこれまでに経験しなかった災害となり、政府はじめマスコミも原発事故対応がほとんどとなり、残念ながら「くらし」への目線は極めて低いものとなりました。被災者にとって必要な「くらし」のサポートは医・衣・職・食・住・育（教育）と全般にわたります。緊急避難所では救助の為の医療・物資が共に不足し、地震や津波から折角逃れることが出来た「いのち」を直後に沢山失うこととなりました。また、福祉避難所の必要な方も一般避難所に混在する状況であり、心が痛めつけられるものでした。平常時の備えがどのようなものであったかが問われます。

被災者の中には、ライフラインも回復していない自宅でひっそりと過ごされていた方が何人もおられました。こうした状況は地域による差があるものの、ひいては避難所の格差につながっていくものでした。今回のように被害が広域に及ぶ場合、地域ごとに様々な差が出てくることは止むを得ないとしても、だからこそ平常時に備えや対応については誰もが等しく「人」としての生活環境を得られるように図っておくべきです。

避難所から仮設住宅、更に最後の棲家としての復興住宅へと歩む中で、時間の流れと共に災害による人権問題は深刻になってくることがあります。筆者は阪神・淡路大震災を経験し、復興の経過をその渦中でつぶさに見てきましたが、目を背けたくなる光景をそのプロセスの中で見るがありました。同じ人間でありながらこれでよいのかと心が痛む場面に多く遭遇しました。生活に困窮し、生活保護を受給する者も多くなっていきました。

また、子供たちは転校を余儀なくされる中で虐めにあうこともありました。その虐めも性質の悪いあつてはならないいじめでした。「あの子と遊ぶから、うちの子の点数が低くなる。うちの子とは遊ばないようにしてほしい」また「遊んではいけない」などを公言して憚らなかったのです。虐める子、虐められる子の双方の子どもの内面を傷つけるものでした。

昨年の3月11日以降、被災地に拠点を作り継続的に24時間体制の支援を行っていますが、その過程でも既に同様の事象が起きています。こうした事例は、枚挙に暇がありませんが、一人ひとりの「人権」がどのような生活場面においても擁護されるような地域社会の構築は、私たちに課された大きな課題です。また、これまでに経験したいくつかの自然大災害から多くの教訓を得ているはずで

東日本大震災における死者15,845人、行方不明者3,339人（2012.2.1現在：出典は東日本大震災復興対策本部）という多くの人々の犠牲を無駄にしないためにも、人権を基盤に置いた新たな社会づくりを進めなければならないと考えています。

2012.2



パネリスト

**鈴木 千代子 (すずき ちよこ)**

宮城県人権擁護委員連合会長

東北人権擁護委員連合会長

全国人権擁護委員連合会副会長

---

【その他、下記要職を兼任】

総務省 行政相談委員

宮城県救急医療協議会審議委員

宮城県ハンセン病協会役員

太白区保護司候補者検討協議会委員



鈴木 千代子 宮城県人権擁護委員連合会長

## 人権擁護委員としての被災者支援活動について

- 1 東日本大震災後の人権擁護委員としての活動について
- 2 震災後の繁忙の中での役場職員の業務遂行について
- 3 人権擁護委員の日を中心とした相談所の開設について
- 4 仮設住宅での被災者支援活動の取組みについて
- 5 被災地の子どもの人権に関する取組活動について
- 6 中学生人権作文コンテスト宮城県大会の取組みについて
- 7 子どもの人権SOSミニレターの取組みについて
- 8 その他





## パネリスト

### 森田 明美（もりた あけみ）

東洋大学社会学部社会福祉学科教授

東日本大震災子ども支援ネットワーク事務局長

東洋大学大学院社会学研究科修了。日米の共働き・シングルマザー・シングルファーザー、10代の母親など子育て家庭の実態と、保育所・幼稚園、児童館・放課後児童クラブなどによる子育て支援に関する実証的研究を行ってきた。地域や家庭で子どもが育つことを支える仕組みをどのように作りだすかが研究の中心課題。関東を中心にして、保育所や児童養護施設の理事・評議員・苦情解決委員としての活動や、13自治体の子ども計画や子育て支援計画策定と推進、評価にかかわってきた。また、子どもの権利条約を日本の子どもの育ち支援にかかわる人たちに徹底するため、広く子どもの権利実現のための実践研究や国連 NGO・NPO 活動にも関わっている。東日本大震災発生後は、東日本大震災子ども支援ネットワーク事務局長として、子どもの復興支援に関する NGO・NPO 活動の連携を担い、また被災地岩手県山田町では、理事長を務める NPO が中学生以上の子どもたちを対象としたおやつ付き自習室を常設で運営している。専門分野は児童福祉。

#### 【その他、下記要職を兼任】

東京都西東京市子ども福祉審議会長  
八千代市次世代育成支援行動計画推進協議会委員長  
船橋市次世代育成支援行動計画策定委員会会長  
飯能市次世代育成支援行動計画推進委員会委員長  
世田谷区青少年問題協議会副会長  
厚生労働省社会福祉士国家試験委員（2009年度から）  
NPO 法人こども福祉研究所理事長  
国連 NGO 子どもの権利条約総合研究所副代表  
子どもの人権連代表委員

#### 【主な著書】

『幼稚園が変わる保育所が変わる—地域で育てる保育一元化』（編著）明石書店  
『よくわかる女性と福祉』（編著）ミネルヴァ書房  
『子どもの権利条約から見た日本の子ども』（共編著）現代人文社  
『逐条解説 子どもの権利条約』日本評論社  
『子どもの権利 日韓共同研究』日本評論社  
『子どもにやさしいまちづくり』『子ども計画ハンドブック』日本評論社  
『シングルマザーの暮らしと福祉政策—日本・アメリカ・デンマーク・韓国の比較調査』ミネルヴァ書房  
『日米の働く母親たち』ミネルヴァ書房  
『日米のシングルマザーたち』ミネルヴァ書房  
『日米のシングルファーザーたち』ミネルヴァ書房 ほか



**森田 明美** 東洋大学社会学部社会福祉学科教授  
東日本大震災子ども支援ネットワーク事務局長

## 子どもの権利の視点が作り出す 復興の力

東日本大震災子ども支援ネットワーク事務局長  
東洋大学社会学部教授  
森田明美



## 東日本大震災子ども支援 ネットワークの取り組み

### 東日本大震災 子ども支援ネットワーク



- 東日本大震災 子ども支援ネットワークは
  - ✓主に国際協力の分野で活動していたNGO（ユニセフ、セーブザチルドレン）、主に国内の子ども問題に取り組んできたNPO（チャイルドライン、子どもの権利条約総合研究所）が立ち上げる。
  - ✓子ども支援・子育て家庭に対する支援を中心に、  
国連・児童（子ども）の権利条約の趣旨・規定に基づき、「差別の禁止」、「子どもの最善の利益確保」、「生命・成長の保障」、「子どもの意見の尊重」をはじめとした「子どもの権利条約」を基盤にした**子どもの参加**による被災者支援・復興支援に粘り強く取り組む。

### 東日本大震災 子ども支援ネットワーク



- 【設立年月日】2011(平成23)年5月5日 \*初会合3月25日
- 【主な活動】
  - ①ホームページなどを通じた、被災した子どもや子育て家庭の支援・復興支援に関わる情報の収集と発信
  - ②子どもの権利条約を基盤にした、子どもや子育て家庭支援・復興支援者・団体のネットワーク
  - ③子どもや子育て家庭に対する支援・復興に向けたアドボカシー(政策提言や権利擁護)
 ※特に、子ども自身によるアドボカシーへの支援に注力

## 子どもの目・子どもの声 のコーナーを設ける

- ・約200通の被災した子どもたちからの声が寄せられる。
- ・支援者たちが読み、考える交流の場として提供



子どもたちの声と大学生・議員・専門家・市民・海外の支援者たちからのメッセージが交差する

## 山田町ゾンタハウスの取り組み



## 山田町ソントハウスの取組み

### □「民・民」の取組み

- ✓ 国際的奉仕団体からの寄付を受け、NPOこども福祉研究所（理事長：森田明美）が企画・運営
- ✓ 地元の方々の協力
- ✓ 多数の民間企業や団体からの寄付・協力（食材、教材、備品など）
- ✓ 大学生ボランティアの派遣
- ✓ 地元で雇用、地元で消費



## 山田町ソントハウスの取組み

### 【開設時間】



- ・ 平日/14:00~20:00
- ・ 土曜日/13:00~18:00  
(日曜日・祝日は休み)
- 140人が登録(中学生490人中)。
- 毎日30~40人が利用中。
- 子ども委員会も活動中。
- 軽食を食べながら大人に相談する姿も。

## 山田町ソントハウスの取組み

### 子ども

- ✓ 学習スペース  
(自習+学習支援、寄り添い)
- ✓ 居場所
- ✓ 軽食提供

見守り、  
支え、  
応援する

### 大人

- 街かどギャラリー
- ✓ 誰でも立ち寄れる
  - ✓ 文化活動拠点
  - ✓ 仮設入居者の交流、憩いの場



## 東日本大震災での 子どもの被災と子どもの困難

## 震災が与えた子どもの困難

1. 家族、親族、友人など支援者の喪失
2. 転居(仮設住宅など)の不自由
3. 活動空間の喪失
4. 経済的な困窮
5. 未成年であるが故の困難
6. 障がい、病気などマイノリティーの子どもの困難
7. 原発事故による避難を余儀なくされたことによる困難

## 東日本大震災で被災した 子どもたちの状況

《学校での被災》文部科学省2011.10.07現在

- ・ 死亡(幼稚園から大学生まで):599人 \* 参考:おとな15949人
- ・ 教職員:34人
- ・ 行方不明:98人
- ・ 負傷:96人
- ・ 学校等の倒壊:4229施設

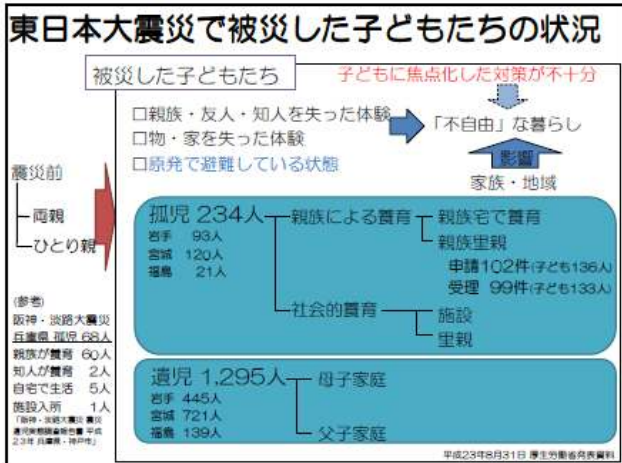
《保護者の死亡》厚生労働省2011.08.31発表

孤児:234人、遺児:1295人

《原発避難》福島県災害対策本部2011.09.01

福島県外への避難(幼稚園・保育所、小中高生)11918人、  
県内での転校6450人、

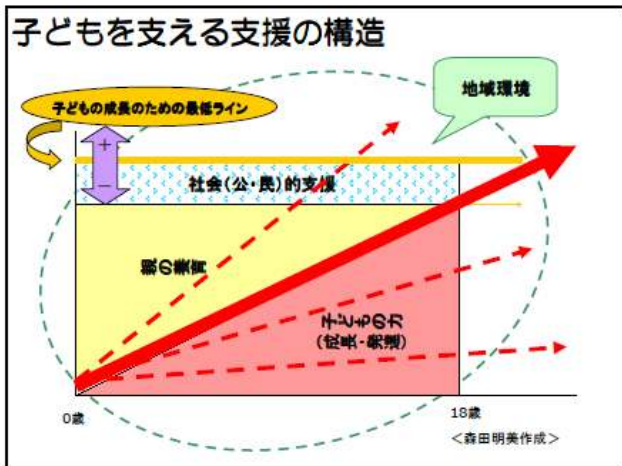




子どもの復興支援の課題

- ### 被災した子どもへの支援
- ①緊急時救済支援段階(生きていてくれてありがとう)  
→遊びと笑顔
  - ②中期的復旧支援の段階(子どものために力を合わせる)  
→普通の暮らしを取り戻す
  - ③長期的まちづくり計画策定の段階  
(子どもとともに震災前よりよく復興する)  
→子ども参加

- ### 子どもの幸せ・・・？
- 子どもの幸せ？  
子どもとしての「今」を生きられること  
子ども自身が持つ力を最大限発揮できる
  - ↑
  - 子どもは環境の中で育つ  
環境：地域(友達、社会)、家庭の総体
  - 子どもの持つ力  
子どもがその年齢にふさわしい力を備えること—体験、教育による支援  
←支える大人が力を合わせ元気になる



- ### 子どもの自己肯定感を支える構造
- 肯定的体験
  - 肯定的関係
- 弱い — 孤立化
- 回復手助
- 市民性
- ・いい人・大切な人との出会い
  - ・いい体験

**子どもの権利をどのような構造で  
実現するのか：総合的・重層的・継続的支援**

子どもと子育て家庭を地域から排除するのか、  
インクルーシブなまちづくりをするのか？  
・多様な生き方・暮らしを当事者主体の地域で  
作り出すこと

- ・「生きていてくれてありがとう」と言える  
市民がいる
- ・SOSが出せる状態であることは自立の土台
- ・寄り添い型支援と専門支援の重層化が必要

↓  
離れているからできることがある

**子ども支援に求められる視点**

**大人たちの孤立感**

経済・関係性(家・職場・地域)



「希望」として何を位置づけていくか

子どもたちのために

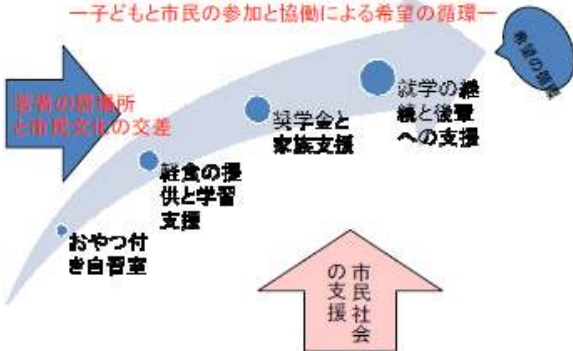


子どもたちとともに

**山田町ゾンタハウス支援の構造**

「おらーほ」と「街かどギャラリー」

—子どもと市民の参加と協働による希望の循環—



**震災復興子ども支援に必要なこと**

- ・ものを失ったことは、不自由であるが子どもにとっては決定的な被害ではない。それをよりよく回復させる大人たちの努力をパートナーとして伝え、実践することが重要。
- ・子どもを中心にした(子どもの参加による)支え合いの関係性を取り戻すことによって、新しい家族や集団、地域の再生は可能である
- ・その努力を大人ができるかが問われている

## 明日を担う子どもたちのための自習室 山田町ゾンタハウス



学習の様子

〒028-1351 岩手県下閉伊郡山田町長崎四丁目2番10号  
電話/Fax : 0193-77-3240  
携帯 : 080-3917-4199  
メール: zonta0904@yahoo.co.jp  
http://www.kodomofukushi.com/



### 【開設時間】

平日/14:00~20:00 ・ 土曜日/13:00~18:00  
(原則として、日曜日・祝日はお休みします。)

### 【山田町について】

岩手県下閉伊郡山田町は、宮古市と釜石市の間に位置する、海のきれいな小さな町です。東日本大震災によって引き起こされた津波と火災によって市街地の大半が壊滅的被害を受け、人口の約4.5%の方が尊い命を失いました。JR東日本 山田線 宮古-釜石間はいまだに不通となっています(平成23年9月1日現在)。産業や経済活動復興までの長い道のりを、全国からの支援や協力を得ながら、地元の方々が力を合わせて一歩ずつ着実に歩んでいます。

### 【山田町ゾンタハウスとは】

「山田町ゾンタハウス」は、明日を担う子どもたちのための自習室です。子どもたち(主に中学生以上)が集い、勉強し、軽食を食べてリラックスできる居場所となることを目指しています。特定非営利活動法人(NPO)子ども福祉研究所が、たくさんの方々の寄付や協力を受けて開設しました。

### 【特定非営利活動法人(NPO)子ども福祉研究所とは】

大学の研究者や児童福祉施設職員、自治体職員や子どもたちのために活動している人々が集まって、子どもが生き生きと成長できる社会づくりを目指し、2005年6月より活動しているNPOです。

### 【山田町ゾンタハウス 設立までの経緯(平成23年4月~9月)】

5月 国際的奉仕団体の日本支部である「国際ゾンタ26地区」より、子ども福祉研究所理事長の森田明美に、復興支援事業に関する問合せが入る。

6月 母と子の自立生活に向けた復興支援「放課後子どもハウス・ゾンタ(仮称)」の開設及び運営案について森田より現地メンバーに提案。現地メンバーが提案を受け入れたことにより、森田ほか3名が被災状況の把握及び開設場所の調査を実施し、概ね街並みが残っている長崎地区で、津波被害を受けたものの利用可能な建物を賃借する方向で検討開始。

7月 「子ども福祉研究所山田町支部」を開設。国際ゾンタ義援金ファンドからの寄付が決定。盛岡ゾンタクラブの皆さんが現地入りし、町の被災状況や候補となっている建物を確認。スタッフとの懇談会で、当事業に対しての力強いご声援を頂く。その後、がれき撤去、現地スタッフの確保、建物の補修、運営方法の検討等を急ピッチで実施。名称を「山田町ゾンタハウス」に決定。

8月 必要な教材や物品、子どもたちの軽食の食材等について、多くの企業や団体、現地の住民の皆様にご支援をお願いし、続々と提供が申し入れられる。開所に向けて、現地スタッフが家族総出の準備作業、地域の中高校生と東洋大学社会学部の学生の協力による「クリーン作戦」をおこなって、居心地と使い勝手のいい環境を作った。子どもたちの参加を得た運営の中心となる「子ども委員会」を組織。8月26日より軽食の提供を開始。第一回子ども委員会を8月28日に実施。(東洋大学東日本大震災復興問題対策チームの助成を受け活動)

9月 9月1日より利用する子どもの本格的受入れ開始。9月4日に開所式を実施。

### 【街かどギャラリーとの連携】

子どもたちを地域で温かく見守る環境づくりのために、山田町ゾンタハウスの一角に「街かどギャラリー」を併設しています。





山田町では震災前には「やまだ街づくりネットワーク」の皆さんを中心に「街かどギャラリー」が運営され、交流と文化発信の拠点になっていました。これからは仮設住宅に入居している皆さんの交流・憩いの場、子どもから大人までみんなの文化活動拠点として、活用していきます。  
(街かどギャラリー事業は、独立行政法人福祉医療機構の2011年度助成を受けて実施。)

**【山田町の住民の皆さんのご協力】**

街角ギャラリーの他にも、山田町の皆さんの温かいご協力をいただいて、山田町ゾンタハウスは運営されています。

例えば、学生ボランティアの宿舎は、一時は避難所として、今は社会福祉施設として利用されている旧・陸中海岸ホテルを、住民の皆さんが力を合わせ、食事実費のみの負担で利用できるよう準備してくださいました。山田町ゾンタハウスを運営する人手は地元の方にお願いし、必要な物品も可能な限り地元で購入、地元の経済復興の一助となるよう努力していきます。

**【事業実施期間】**

平成23年9月1日から2年間 ※2年経過時点で、地域の復興状況や子どもたちの利用状況等を参考に、その後の実施や運営体制について総合的に検討します。

**【山田町ゾンタハウスを利用できる人】※「街かどギャラリー」はどなたでも利用できます。**

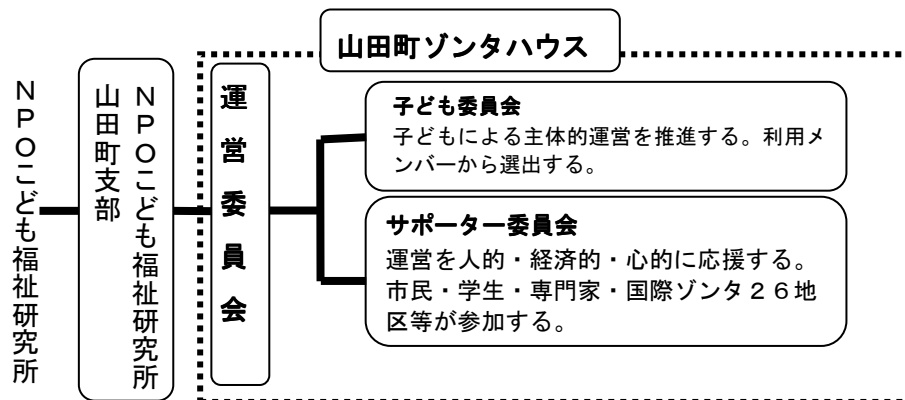
山田町全域の中学生・高校生・一般の学習希望者  
(送迎は致しませんので会場まで自力でこられる方に限ります。)  
こんな人はぜひどうぞ！

- ・家にいると勉強する気にならない。 ・何をどう勉強したらよいかわからない。
- ・資格を取りたいが勉強がわからない。 ・今さら聞けない。もっとわかるところにもどりたい。

**【協力企業・団体(順不同・敬称略・平成23年10月1日現在)】**

- ・山田町の皆さん ・Zonta International(ゾンタインターナショナル)と会員の皆さん
- ・社会福祉法人親和会 ・山田町商工会 ・やまだ街づくりネットワーク ・凸版印刷株式会社
- ・東京書籍株式会社 ・誠美堂出版株式会社 ・株式会社 学研教育出版 ・岩手県生活協同組合連合会
- ・山崎製パン株式会社 ・全労済 ・大和証券福祉財団 ・東洋大学 ・大島椿株式会社
- ・紫波町教育委員会 ・日本公文教育研究会 ・三重県立みえ夢学園高等学校 ・阿倉川運送株式会社
- ・伊賀市災害ボランティア支援センター

**【運営組織】**



**【地図】**

